

I S S A (国際社会保障協会) の最近の活動

井 口 直 樹

(厚生省年金局資金課課長補佐)

(前在ジュネーブ国際機関日本政府代表部一等書記官)

はじめに

I S S A の最近の活動状況については、筆者はすでに別の機会に簡単に報告しているので(「週刊社会保障」5月26日号ご参照)、本稿では、これを補足する意味で、これまで感じた点を中心に私見を述べてみたい。

1. I S S A の基本的性格

周知のように、I S S A の本部はジュネーブの I L O 本部ビルの9階、I L O 社会保障局と同じフロアーにあり、代表電話番号も I L O と同一となっている。

又、I S S A 職員の職階制も I L O と全く同一で、あたかも I S S A は I L O の一部局の如き外観を呈している。

実際、I S S A の憲章を見ても、事務局長の選任等主要事項に関しては I L O の関与を認めており、下部機関とは言えないまでも、I L O の実質的な後見下にあることは疑い得ないであろう。このことは、I L O の年次報告に I S S A の活動状況報告が記載されていることや、又、I L O が I S

S A に対して行っている直接、間接の援助の大きさから見てもうなづけることと言える。

しかし、このように I L O の実質的な大きな影響下にあるとは言え、I S S A は非政府機関(N G O)として独立した組織であることを忘れるべきではない。

とくに、I S S A が非政府機関である点は、I L O が政府機関である点との対比で十分注目されるべきである。

この点をどう考えるかによって、I S S A の活動に何を期待すべきかが異なってくるからである。

2. 親睦機関か援助機関か

I S S A が非政府機関であることの意味は、まず何よりも主要加盟機関が各国内の各種社会保険団体であり、その主要関心事項が各国政府のそれとは相当隔りがある点に見出される。

端的に言えば、非政府機関である各国の社会保険団体にとって、I S S A とは何よりも各国の社会保険団体のクラブであり、高々、技術的観点からの互いの経験・意見

交換の場であって、それ以下でもそれ以上でもない。

一方、ISSAのメンバーの中には社会保険の運営主体たる政府も少なからず含まれており、これら政府の中にはISSAのクラブ的性格にあきたらないものを感じるものが出てきても不思議はない。

というのは、政府の立場から見ると、現在のISSA組織の成立経緯からして、ISSAの活動は本来一定の政治目的（具体的には国際労働基準の一環たる国際社会保障条約の普及）に沿って行われるべきものと考えられ、国連諸機関がその目的・効率性の観点から見て厳しく見直されつつある今日、単なる親睦中心の活動ではいかにも存在意義が乏しいと映るからである。

このような考え方はILO自身もISSAに対し抱いており、こうした観点からの批判を背景にISSA内にISSA活動の見直しのための作業委員会が設けられたことはすでに前述の筆者のレポートでも紹介したとおりである。

作業委員会の検討結果は、ISSAのこれまでの活動に対し、どちらかと言うと肯定的な評価であったが、一部政府、ILO事務局はこの結果に必ずしも満足しておらず、引き続き見直しの作業を続けるよう求めている。

しかし、一方、西独等西欧大陸各国の各保険団体はこうした批判には冷やかで、むしろ、現状維持の姿勢が強く、改革派と対立しているやに見受けられる。

こうした両者の対立の間に立って、ISSA事務局としては、意見調整に努めては

いるが、結局のところは加盟機関数の多い西欧大陸諸国の加盟機関の意向に沿い、基本的には従来のラインの部分修正で事態を乗り切りたい模様である。

このような意見の相異の背景には、現在のISSA設立のはるか以前より存在していたISSAの前身組織加盟以来の長い伝統を有する西欧大陸諸国メンバーとその他のメンバーとの間に、ISSAの役割についての大きな認識ギャップが存在するようである。

いずれにしろ、現在のISSAの活動は一部に異論はあるものの基本的には親睦的色彩が強く、途上国に対する援助や直接的な相互利益の追求をめざした国連諸機関とはその性格を基本的に異にしていると言える。

3. 社会保険中心の活動——貧困問題は対象外

以上のようなISSAの基本的性格の帰結として国際社会保障協会という名前に反し、その活動分野はかなり限定的なものとなっている。

ISSAの活動は、医療保障、老齢保障、家族手当、労働災害補償、失業補償等の各社会保障分野をカバーしているが、我々にとって奇妙なことは、社会保障の根本理念とも言うべき最低生活保障、つまり、生活扶助が活動の対象から全く外されていることである。

この理由が、単にISSAの歴史的沿革によるものなのか、あるいは、貧困問題と

いう途上国問題の核心とも言うべき困難かつ政治的にもセンシティブな問題は I S S A が取扱うには荷が重過ぎるという I S S A 自身の政治的判断によるものなのか判然としないが、いずれにしろこのことによつて、I S S A は国際社会保障協会というよりも国際社会保険協会といったイメージを強く与えていることは否めないように思われる。

これに対し、過去において、インド等から貧困問題をも活動対象にすべきとの意見が出されたが、西欧の主要メンバーからの強い反対により採用されるに至らなかった経緯があるということである。

もし、こうした意見を容れ、I S S A を国際的な貧困ロビーにしたときには、西欧メンバーの多くが脱退し、I S S A の組織は解体の危機に瀕するだろうというのがリス I S S A 事務局長の予想である。

貧困問題を扱うべきか否かは判断がきわめて難しい問題であるが、I S S A がこれまで貧困問題を扱ってこなかったということは I S S A の親睦的性格と表裏の関係にあり、I S S A の性格を対外的に非常に曖昧なものにしている大きな原因の一つとなっていることは否めないように思われる。

4. 地域活動の重視へ

以上のように、I S S A の活動の基本は社会保険団体中心のクラブ的な性格のものであるので、活動の重点と言っても対外的に迫力のあるものを打ち出すことは必ずしも容易ではないようである。しかし、先に

触れた作業委員会は、今後の I S S A の活動の向うべき方向の一つとして地域活動の重視を唱っており、今後はこれに沿って活動の重点化が図られて行くことになると思われる。

このような地域活動重視の背景には、同じく社会保障に対する関心と言っても、途上国と先進国、又、先進国の中でも分権的な社会保険制度の発達した国と集権的な制度の発達した国等とで内容が大きく異なることから、I S S A の活動をより地域的特性に合せたものにし、各国、各メンバーの関心を出来るだけ汲み上げて行こうという意図が存在するように思われる。又、これによって、前述の改革派の批判にも応えて行こうとするものであることは言うまでもない。

しかし、親睦団体としての性格をそのままにして、地域活動の強化を唱えてみても具体的な活動目標がメンバーにとって実のあるものにならない限り、どの程度意味のあるものとなるか甚だ心許無いと言わざるをえない。

5. I S S A に期待されるもの

I S S A に何を期待すべきか。

単なる親睦団体であっても国際組織として存在すること自体に意義があるのだからよいではないかという意見にも十分な理由があると思われる。

しかし、これだけ世界的に国際機関のあり方が厳しく問われている中で、I S S A だけがその渦の外にいることは極めて難し

いし、又、仮りにそれが出来たとしても、途上国のISSAに対する失望といった形でISSAも無傷でいることは難しい状況にあるのではなからうか。

したがって、ISSAとしても、これまでの保守的な姿勢を改めて、（とくにヨーロッパ的ローカル性からの脱皮が必要であろう）現在、ISSAに何か期待されているのか、又、何がなしうるのかを再度基本的に問い直してみることが必要な時点に

差しかかっているように思われる。

しかし、翻って、費用削減の一環として独語文献の廃止を行おうとする提案すら独語圏メンバー（国の数は少ないがメンバー数は多い）の強力な反対で実現しない現実を見ると、日暮れて道遠しの感も禁じえない。

ISSAが、今後名実ともに存在感のある機関として世界から注目される日が来ることを期待したいものである。（了）